

目 次

1. 卷頭言	2
2. 海外留学助成選考規定・海外トラベルグラント選考規定	3
3. 教授就任挨拶	5
准教授就任挨拶	13
4. 退任教授挨拶	14
5. 学会報告	24
6. 母校の近況	25
7. 支部だより	26
8. 同窓生の近況 (ア) 受賞者報告	27
(イ) 病院紹介	29
9. シリーズ「今日から私も担当医」	31
10. シリーズ「2代目はじめました。」	45
11. 会員の声	49
12. シリーズ「医療・医学への最前線」	77
13. 教室紹介	81
14. 令和3年度 代議員名簿	83
15. 令和3年度 第一回代議員会開催報告	85
16. 計報	86
17. お知らせ	87
18. 編集後記	89

◎住所変更等は同窓会にもご一報下さい。

〒701-0192 倉敷市松島577 川崎医科大学同窓会

TEL 086-463-6580 FAX 086-463-6581 E-mail:dousou@med.kawasaki-m.ac.jp

「川崎祐宣先生と創設時の母校を語る」

社会医療法人 緑社会 金田病院 理事長 金田 道弘 氏
(川崎医科大学附属高校1期生・川崎医科大学4期生)



人生で一番楽しかった附属高校の3年間

——附属高校の思い出を話して下さい。高校生活はいかがでしたか。

今までの人生を振り返ってみた時に、附属高校の全寮制の3年間が最も楽しく思い出深い3年間でした。川崎学園第1期生として、今から50年前の昭和45年(1970年)に医科大学附属高校に入学しました。私たちが入学した時には、大学の入学式は未だ行われておらず、学園内の在校生は私たち附属高校第1期生55名以外は誰もいませんでした。それから約2週間後に医科大学の入学式があったように記憶しています。すなわち、川崎学園は附属高校の誕生で産声を上げたことになります。

附属高校時代の3年間が人生で最も楽しく思い出深かった理由を私なりに分析してみました。①医師を目指すという共通の目標と価値観を同級生全員が持っていたこと、②後継者としての周囲からの

期待の重圧や葛藤や苦悩も共通だったこと、③全寮制のため、同級生との繋がりが極めて強かったこと、④学校創設期の第1期生であり、あらゆることを先生方と共に創っていったこと、⑤情熱と人間的魅力に溢れた先生と舍監の先生ばかりだったこと。以上の5点のように思われました。特に全寮制は、人生の最も多感なこの時期に寝・食・学・談を共にすることは、その絆を深めるには最適でした。毎晩のように熱く人生を語り、学問を語り、医療を語り、将来を語り、恋を語ったものでした。そして、私たちの学校と新しい医学教育の歴史は私たちが作るという気概・情熱・夢に、先生方も私たちも溢れていました。

舍監・伍賀先生のこと

1年生時の寮(現在の医療短大の寮)で舍監をお務めくださった伍賀(ごか)道一先生のことは、3年間で最も印象に残っています。私たちからすればお祖父さんの年齢に見えましたが、細い体から発する大きな声で良く叱られたものでした。両親以外から叱られることはほとんどなかった私にとって、親ではない伍賀先生が期待を込めて本気で叱ってくださること自体がありがたく、ちょっと心地良く幸せな瞬間でもありました。叱られた時に慰めてくださるのは決まって優しい寮母の奥様でした。そんな伍賀先生が私たち高校1年生に日課として課したのは、自分たちが使用するトイレの掃除でした。これから長い人生を生きていく上で大切なことをトイレ掃除を通して学ぶことができ、今でも感謝しています。

あれから約10年後、私は思いがけない伍賀先生の訃報に接しました。すでに医師として勤務していた私は、岡山市桜橋のお宅を探して駆けつけました。奥様は私のことをはっきりと覚えていてくださいました。開校と同時に入学したばかりの先輩のいない高校1年生、先生方も私たちも全てが手探りだった1年目、中でも最も思い出深い寮生活を、先生の仏壇の前で奥様と共に回顧し、あの頃と先生を偲びました。伍賀先生には愛と情熱と強い信念がありました。私たちは社会人としての基本を附属高校の寮で学んだのでした。

初代校長の川端清先生、2代目校長の歳森博先生はじめ、附属高校の先生方も素晴らしい情熱的で温かく個性あふれる先生方ばかりでした。当時の先生方の情熱と一生懸命さは、私たち1期生全員の魂を揺り動か

しました。勉強することの楽しさと喜びを附属高校で学び、多くの生涯の友にも出会うことができました。

高校生活あれこれ

悪いこともしました。とにかく仲が良かった55名の1期生でした。開学前の医療短大の寮に最初の1年間は暮らし、渡り廊下で繋がった開学前の医療短大の校舎で学びました。2クラスが同じ階に南北で並んで教室がありました。ある日、私たちAクラスの1時間目の授業は人気があった地理の鶴藤鹿忠先生でした。2時間目には鶴藤先生はBクラスで授業をされます。1時間目と2時間目の間の10分間の休憩時間に、全員で「よしやるか！」ということになりました。何をしたかというと、Aクラス全員が、Bクラスの教室に行き、Bクラス全員がAクラスの教室に行き平然たる態度で着席したのでした。そこに鶴藤先生は何も知らずにBクラスの教室に入り、前の時間にAクラスで私たちに行ったと同じ授業をAクラスの生徒と気付くことなく始められました。つまり、鶴藤先生がBクラスの教室で授業をされているのは、実は10分前まで授業をしていたのと同じAクラスの生徒でした。私たちは途中から笑いが我慢できず、あちこちでクスクス笑い声になり、授業が少し進んだところでひょうきんな鶴藤先生もついにニコニコしながら気付かれたのでした。「やったな！？」その後全員が元の教室に移動したものでした。1人残らず55名全員が一致団結して行った、1期生だからこそ成し遂げた前代未聞の悪ふざけでした。先生方には申し訳ありませんでした。ただ、この強固な団結力と一糸乱れぬ行動力は、行動を24時間日々共にしている全寮制の学校なればこそと思いました。

思い出の一つが修学旅行です。私は生徒側の担当者の1人として、どこに行くか、どうやって行くか等について、同級生や先生と繰り返し協議しました。北海道とか沖縄とかの案がありましたが、学校側から一つ条件がつきました。飛行機はだめだということでした。その理由は、万一その飛行機が墜落したら、附属高校1期生が全員いなくなってしまうから、ということでした。これには納得できました。協議の結果、飛行機でしか行けない沖縄はなくなり、第1回修学旅行の行き先は陸路で行く北海道と決まりました。東京まで新幹線、上野から青森までは夜行寝台列車、青森函館間は今はなき青函連絡船でした。上野駅に到着すると、同級生で仲が良かった東京出身の萩原温久君のお父様がみんなへの差し入れを持って待ち構えていてくださり、とても嬉しかったのを覚えています。

私のもう一つの高校時代の思い出は、高校3年の夏休みにたった1人で3日間行った韓国旅行でした。中学校卒業後高校入学前の春休みに1人で北海道を3日間、ユースホステルに泊まりながら巡って以来の大好きな一人旅、しかも人生初の海外旅行でした。地図を見ていると韓国は北海道よりはるかに近い隣国であり、経費を計算すると北海道とあまり変わらないことが分かりました。私の一人旅は、綿密な計画書を父親に提出し許可を得ることから始まりました。切符の手配も予約もすべて1人で行いました。時刻表を睨みながら旅行計画を立てる過程が実は私の最も楽しいひと時でした。

資金の調達に関しては私なりの㊙戦略がありました。診察中の父親のところに綿密な旅行計画書を持参し、すぐ近くに看護師や患者さんがおられるところで深々と頭を下げて資金援助を懇願するのが私の作戦でした。父はそのことに気づきながら、いつも嬉しそうにその場で財布から資金援助してくれました。今になって考えると、よくぞ高校生の一人息子の初めての外国への一人旅を許してくれたと頭が下がります。もしも私が高校生の息子に頭を下げられたとしても到底承諾はできなかっただと思います。

私にとって、行ったことのないところへの親元を離れて行く一人旅は、困難に出会うことも少なからずありますが、次々と様々な人・文化・乗り物・風景に出会う夢のような楽しい時間でした。言わば親の許可と資金援助を得て行う合法的家出のようなものでした。韓国に1人だけで行った理由はただ一つ、親しい友人を何人か誘いましたが、親の許可が降りなかったからでした。ただ、そのことは想定済みで1人で行くための口実だったかも知れません。高校最後の夏休みのチャンスにぜひとも行きたかった私は、学校の先生はきっと許可してくれないだろうと思っていたので、学校には内緒で行く計画でした。しかし、見事に学校にバレてしまいました。母親が話したのか同級生からかは今も不明ですが、今から考えると前者のような気がします。結局、かつて韓国で教員として働いておられた先生が附属高校図書館長としておられ、その植田先生

がかつての同僚で信頼の厚かった釜山市教育委員会指導主事の朴泰巨先生をご紹介ください一件落着したのでした。

大阪伊丹空港からソウル金浦空港までは僅か2時間。空港には朴先生の大学生の息子さんが出迎えに遙々来てくださってました。釜山のお宅や韓国料理のレストランにもご招待ください、初対面の高校生の私をご一家で心からもてなしてくださいました。息子さんは、慶州郊外の世界遺産の石窟庵や仏国寺を案内くださいり、さらにソウルまで特急列車で一緒に行ってくださいました。3日目には、仲良くなつばかりの息子さんとの釜山港での涙の別れが待ってました。釜山から下関までは初めての関釜フェリーでした。対馬海峡は波が荒く船がよく揺れたことを記憶しています。帰国後韓国での話を聞いた私の両親は大感激し、朴先生ご一家との家族ぐるみの交流は数年続きました。生涯忘れることにできない高3夏休みに1人で行った初の海外旅行でした。

——高校では矢坂で理事長招待の日がありましたね。

1年生のある日、創設者川崎祐宣先生の岡山市矢坂のご自宅に、附属高校1期生全員をお招きくださいり、芝生の庭の上でバーベキューをご馳走になった思い出があります。川崎先生が、それぞれ芝生の上に車座になったグループを回って来られて優しく声かけてくださいました。笑顔と愛にあふれ、どんな時も私たちを温かく包んでくださる素晴らしい方でした。私たちはそのことをいつも感じていました。

——医科大学附属高校の存在意義とは何ですか。

後継者がいないために地域の医療機関がどんどん減っていき、地域医療崩壊の危機が叫ばれています。私は、全国で唯一の医科大学附属高校である本校は、地域医療の存続・後継者の育成にとって大変貴重な存在だと考えています。附属高校3年間に、同じ志を持った仲間と共に、学校と寮で鍛えられて社会人になる、医師になる心と体の基礎が形作られます。医科大学ではさらに厳しく鍛えられています。私自身9年間にこんなに鍛えてもらえた訳で、母校に心から感謝しています。同じ目標を見つめつつも、跡を継いで地域医療を支えることを運命づけられた重圧に悩み苦悩する、私と同じような仲間たちが大勢いる。仲間同士励まし合い、高め合いながら、同じ目標をもって切磋琢磨しつつ学び、プレることなく目標に向かって歩み、やがて地域医療の担い手となって生まれ育った故郷に凱旋し、地域医療に貢献し、自己実現と期待される使命を共に果たすことができる訳です。そのことが母校に対するご恩返しになると考えます。母校に対する評価は、卒業生である私たちに託されているのです。

医科大学時代について

——高校と大学との違いについて。

附属高校3年間に加えて大学1年生と2年生の2年間の計5年間の寮生活でした。大学からは新しい多くの仲間が全国から加わりました。一般大学を卒業後に医師を目指して医学部に入学した人も複数いて、多様な同級生から学べたことがたくさんありました。その中にあって附属高校からの同級生は、言わば幼なじみの感覚でした。私が理事長を務める病院のある岡山県北地域には、附属高校や大学の同窓生が何人も理事長や院長を務めていますが、どのクリニックも病院も地域住民からの評価が高く大変嬉しく思っています。

——大学時代の最大の思い出とは。

振り返ってみて最大の思い出は、後に川崎医科大学学長をお務めになった皮膚科植木宏明教授（当時）との出会いでした。奥様植木絢子先生は病理学教室の助教授でした。何かのきっかけで植木先生との接点ができる、悩んだ時には何度もご自宅にお邪魔して話を聞いていただきました。どこまでも誠実で探究心旺盛な植木先生と奥様の絢子先生の優しさのハーモニーに、感性豊かな金田青年は強く憧れたと同時に、学習することや研究することの楽しさを両先生の姿から学びました。

医科大学4年生の春に、私は植木先生と私の父にある宣言をしました。「4年生で成績1番になって特待生になる」というものでした。それから1年間は私は全ての授業の予習と復習を欠かさず毎日行いました。授

業が終了後すぐに大学の自習室に行きその日の復習をしてから帰宅し、翌朝には7時30分には登校して自習室でその日の予習をしました。しかしながら、1年間の総合成績は平均点80点、順位は残念ながら3番でした。当時は順位は通知されていなかったので、植木先生に教えていただきました。「良く頑張った」と褒めてくださいました。日々の努力の積み重ねが結果に繋がることを改めて学びました。なお、その年の成績順位1番は附属高校・医科大学と9年間不動の首席であった岡山の小林建太郎君でした。実は、小林君とは岡山大学附属中学校も同級でしたから、中高大と12年間同級生だったことになります。

平成28年、亡くなられた植木前学長を偲ぶ会が川崎医科大学現代医学教育博物館で開催されました。約30年ぶりに奥様の絢子先生にお目にかかりました。お悔やみや感謝の思いが詰まって言葉にならず、先生の手を握った瞬間万感極まり目から熱いものが溢れて止まりませんでした。

川崎祐宣先生のこと

——祐宣先生は寮に来られたりしましたか。

附属高校の時には生坂の寮にも時々来られました。温かく私たちを包み込むような笑顔でした。私のことをいつも覚えていてくださり、必ず「お父さまお母さまはお元気ですか」と声をかけてください感激したものでした。

私の一番の初代理事長との接点は、実は卒業後にありました。私は川崎医大を卒業した後、実家の病院の医師派遣のことがあり岡山大学第一外科に入局しました。2カ月間岡山大学病院で研修を受けました。その頃理事長から生涯忘れられないお言葉をいただくことになりました。

川崎医大を卒業し、岡大一外に入局してまもなく悩んだ時期がありました。無謀にも母校理事長室に電話して理事長にお時間をお取りいただきたいとお願いしました。すぐに日時を指定してくださいました。待ちに待った日、私は嬉しさのあまり非常識にも手土産ひとつ持たず手ぶらで16階の理事長室を訪問していました。理事長応接室で約1時間2人だけでお話を伺いました。それが私にとって一番の理事長との思い出です。

——悩まれたとはどういうことなんですか。

理事長室に伺いたいと考えた理由は、自分自身が母校で9年間学んだ医療の原点を確認したいという強い思いでした。

岡大一外に入局した時の同期生は21人で、すぐに仲良くなりました。出身大学は、半分が岡大卒、半分が私と同じく他学卒で、川崎医大出身者は私だけでした。私のように実家が病院や医院で、その後継者を期待されているという人は僅かでした。

大部分の学生が医師の家庭に育ち、親の姿を日々見ながら成長し、いつかは父のように地域医療に貢献したいとの憧れが共通の思いだった川崎時代とは、異なる環境がそこにありました。医療人の親の跡を継ごうとすること自体が異質に思われている雰囲気を敏感に感じ、強い衝撃を受け、苦悩しました。母校ではそれが素晴らしい価値と考えて疑わなかったことが否定されたのです。子供が親の職業を選んだ訳ではないのです。

私が建学の理念に共鳴し、情熱溢れる素晴らしい先生方から日々学んだ川崎学園の原点を、直接理事長にぜひひとも直接確かめたいという強い願いでした。

理事長は、創設時から今に至る経緯について、その思いを私に語ってくださいました。最も印象深かったのは「昼も夜もなく患者のために一生懸命尽くした。そうしたらたくさんの患者さんが来てくれた。それで利益が出ても、私は自分個人のために一切使わなかった」というお話でした。私は、今まで歩んできたこの道が私の道なのだと確信し、いっぺんに安心することができました。これから的人生の軸が定まったと感じ、あの日から私は迷うこととも悩むこともなくなりました。今でも理事長に面会したあの日のキラキラと輝く温かい理事長の眼差しを思い起こすと、感謝の念が込み上げてきます。

(2020年8月24日、金田病院で川崎学園大学事務局総務課・兼本和樹参与が取材)